

3 西伯耆における大型器台の変遷と画期

1 研究史と課題の設定

西伯耆（鳥取県西部）地域では、弥生時代中期後葉の古段階以降、日野川中～下流域の遺跡を中心に、脚柱部に多条の凹線文を施文することをおもな特徴とする大型の器台形土器がまれに出土する。ときにその復元器高は60cmを超える。

最初にこの大型器台が注意されたのは、米子市青木遺跡の出土資料に対してである（青木遺跡発掘調査団1978、p354-356）。青木遺跡では、中期後葉古段階から新段階にかけての大型器台が複数個体出土しているが、①いずれの個体も赤色塗彩されていること、②古相のものは脚柱部に透かしがないが、新相になると円または方形の透かしがあるなどの型式変化が認められること、さらに、③これら大型器台が墓域への供献土器の可能性が想定されることを指摘。とくに③を重視して、当時はまだこの地域に出土例がなかった、以後（後期）の大型器台の変遷について、「この時期に定着化する鼓形器台とは器形を異なえて、墳墓内の供献遺物として存在し変化して行く土器であったとみられる」という予察も加えた。今日における大型器台出土例の蓄積を前にするとき、この予察は、極めて示唆に富んだ卓見と評価できる。

1980年代後半には、日野川中流域に位置する伯耆町（旧・溝口町）長山馬籠遺跡で大型器台一個体を含む中期後葉新段階の土器群がまとまって出土。この土器群の構成と編年の位置付けを検討した中原齊は、大型器台について、①大きく開き内外面とも加飾された「特異な口縁部」形態、②脚柱部に施された5条単位の凹線文と貫通しない「矢尻形の彫りこみ」、③全面赤彩といった特徴から「吉備地方に類例を求めることができる」と指摘した（中原1989、p206-208）。大型器台の出自に言及した初例として重要である。

長山馬籠遺跡が立地する日野川中流域は、東伯耆（鳥取県中部）地域の小鴨川流域とともに、蒜山高原を經由して吉備地方と短絡するルート上にあり、土器の移動が活発化する中期後葉には、中原の指摘以降、両地域で吉備地方を出自とする非在地系土器が散見、注意されるようになった（根鈴ほか1992）。それらの中で、長山馬籠遺跡の大型器台は、岡山県奥坂遺跡A地区出土例（高畑ほか1983）などと器形や加飾法が類似している。

一方、日野川右岸の大山山麓に位置する後期の遺跡か

らは、1990年代以降、米子市日下1号墳丘墓、大山町仙谷5号墳丘墓などおもに墳丘墓の供献土器として大型器台の出土例が知られるようになった（小原ほか1992、門脇ほか2000）。しかし、この大型器台の系譜については、青木遺跡での注意喚起があったにもかかわらず具体的に検討されることなく今日に至っている。

また、大山山麓に所在する徳楽墳丘墓では、1920年代と1930年代の二度にわたる発掘調査で、竹管文、半截竹管文の加飾を大きな特徴とする多量の土器が出土したことが知られているが、その中に、脚柱部にクシ状工具による沈線文やタガ状の貼付け凸帯による区画、縦長長方形の透かしをもつ大型器台の破片が多く含まれている。

この土器群に早くに注目したのは東森市良で（東森1985）、花谷めぐむとともに各地に散在する資料を丹念に集成した上でその時期を検討し、『小谷式』土器、つまり古式古墳出現期を遡るものでないことは明らか」という結論へ導いた（東森・花谷1992、p67）。この下限の時期については東森らの結論が正しいことはほぼ疑いないが、上限の時期については、東森らも「編年の位置づけについてはさらにいっそうの追求を必要とする」と認めているように、検討課題として残されたままである。

このように、西伯耆地域の大型器台については、中期後葉から後期末にかけて、一部にハイエイタスや相対時期の不明瞭があるものの、概ね通時的に存在することは認識されてきているといつてよいだろう。しかし、それらが同一の形式的序列（系譜）上に位置するものかどうかについてはまったく検討されてこなかった。

けれども、わたくしは、上述例をはじめ近年の他遺跡からの出土例を勘案したとき、時期ごとに形式的特徴が指摘されてきた大型器台が、実はおおまかにはひとつの系譜上で理解可能と想定できるとともに、後期中葉を画期としてその性格が大きく転換するのではないかと考えるに至った。本稿は、この二点を具体的に提示することを目的としている。

なお、相対時期の比定にあたっては、妻木晩田遺跡で濱田竜彦が試みた編年（濱田2003a・b）を参考している。ただし、濱田の編年では各様式の器種組成が壺、甕以外は詳らかではないので、本稿では、大型器台と壺、甕との共伴関係や細部形態及び施文の特徴での共通性を

考慮した上で時期比定を行った。

2 大型器台の型式的変遷 (第2図)

IV-1 (中期後葉古段階) 凹線文の盛行期。大型器台の出現期。内傾する口縁帯・脚端部帯に凹線文、外反する口縁部内面にクシ状工具による波状文を施文。脚柱部外面に5条一単位の凹線文を2段、脚台部外面にも3条~7条程度を一単位とする凹線文を1段ないし2段それぞれ施文する。脚台部外面に鋸歯文を施す例(3)もある。この段階では、まだ脚柱部への透かしや切り込みはみられない。IV-3まで外面全面赤彩。

IV-2 (中期後葉中段階) 口縁部は大きく外反し、口縁帯を上下に大きく拡張。その外面に凹線文と貝殻腹縁による斜行文を施文し円形浮文を貼付け、内面にクシ状工具で波状文を施文する。脚柱部および脚台部の凹線文帯は前段階同様だが、脚柱部外面に縦長三角形の切り込みが出現する。脚端部外面は無文化。

IV-3 (中期後葉新段階) 口縁部資料を欠くが、他形式を参考にすれば、口縁帯は上下あるいは断面L字形に最も拡張するか。脚柱部および脚台部の凹線文帯は前段階同様。縦長三角形の切り込み(7)とともに縦長長方形の透かしが出現(5)する。

V-1 吉備地方との親縁性を示していた大型器台が在地化を指向する段階。8では器高が縮小し、口縁帯・脚端部帯幅も他形式の口縁帯同様に縮小する。口縁部外面の凹線文、円形浮文は残るが、内面の波状文はこの段階までに施文されなくなる。脚柱部・脚台部の凹線文帯は単位が崩れてらせんに施文される一単位の凹線文となる。また、9では器高の縮小や脚端部帯幅の縮小は8と同様だが、やや外反する脚柱部に縦長長方形の透かしが1段と、6条と3条をそれぞれ一単位とする凹線文を施文。脚台部にも2条の凹線文を施文する。

なお、次段階までに、脚柱部幅が絞られた型式が出現する(10・12)。この大型器台は、口縁部・脚端部の形態では11と相似するものの、円孔による透かし(切り込み)に特徴があり、出自を地域内で遡ることが難しい。このため、この土器がV-1段階もしくはIV-3段階の大型器台から型式分化したものかは

にわかに判断できない。一方、以降の系譜については、松尾頭地区の第48竪穴住居跡(松本ほか2000)や仙谷5号墳丘墓(門脇ほか2000)(いずれもV-3)などで鼓形器台の脚柱部に円孔透かしを施したものがある。このことから、この型式の器台は、V-3段階以降は小型化して鼓形器台に収斂されていく可能性もある。

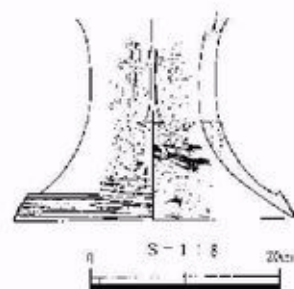
V-2 型式学的には古相と新相に分けることが可能。

古相: 器高が再び拡張を指向し始める。縦長長方形の透かしも縦方向に拡張して1段化。口縁端部と脚端部は直立ないし外傾して有段化し、外面の施文は擬凹線文に替わる。また、口縁部内面の調整も前段階までのハケ目からこの段階以降へラミガキに変化する。

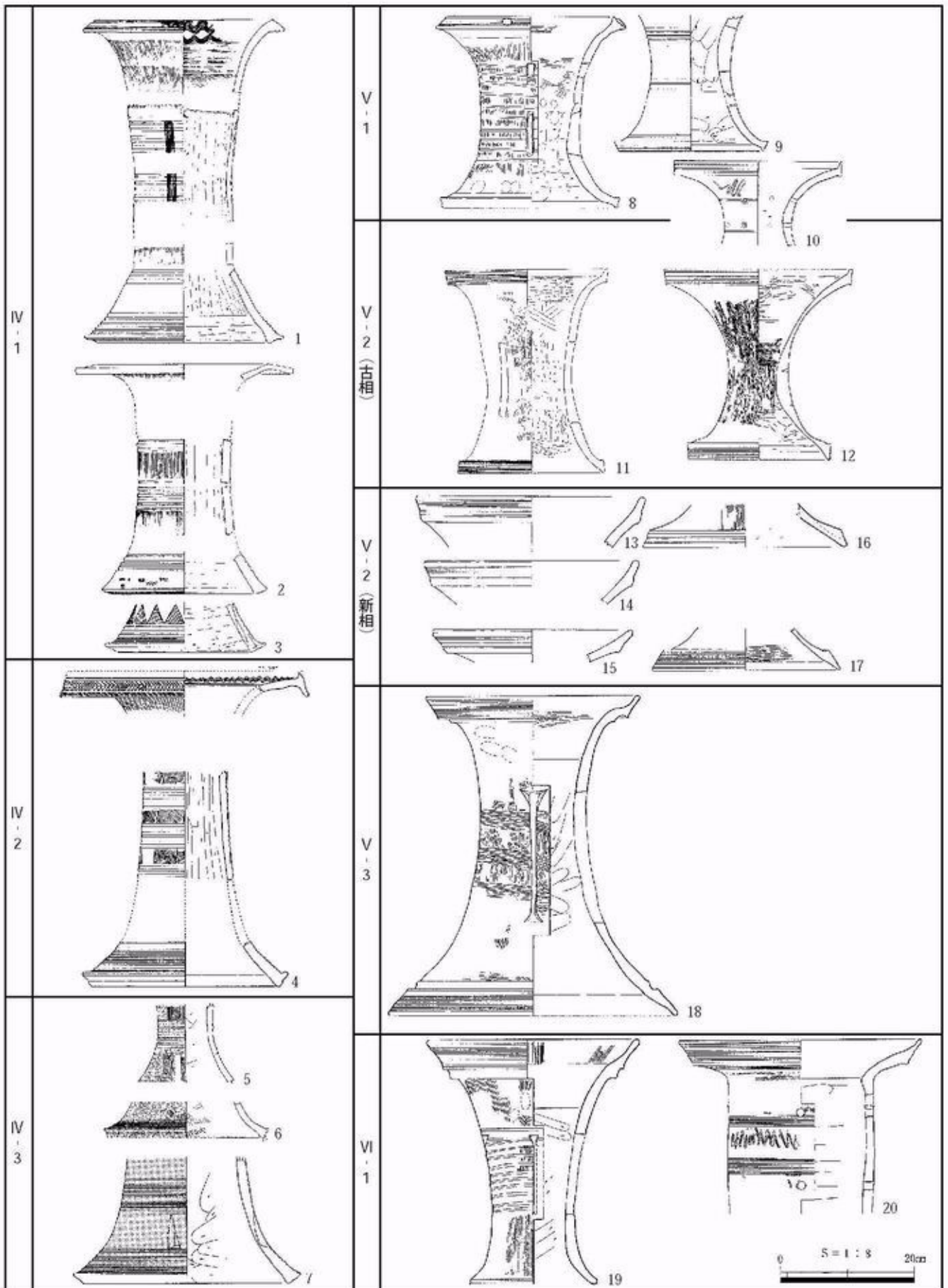
新相: 口縁端部と脚端部は外傾から外反を指向し、有段幅も拡張。西伯耆地域で脚柱部の出土例がないが、因幡(鳥取県東部)地域へ搬出されたとみられる土器(鳥取市滝山猿懸平1号墓出土、第1図)にこの時期の脚柱部~脚端部例がある。脚柱部はさらに上下に拡張するとともに、外反度を強める。脚端部外面にはヘラ状工具により1条ずつ施文された計6条の沈線文が巡る。また、縦長長方形透かしの上下両端が「くさび形」を呈するようになる。

V-3 口縁端部と脚端部の有段がそれぞれ2段になるとともに幅が広がり、外面の施文がハケ状工具による多条平行沈線文に変化。器高はさらに拡張して40cmを超え、中期段階の器高に匹敵する。脚柱部は上下に外反を増し、透かしも縦に拡張して上下両端は引き続き「くさび形」を呈するとともに、中位にらせん状に10条一単位となるクシ状工具による沈線文を3段巡らせる。

VI-1 2段に有段化した口縁部はさらに拡張して外反し、外面にハケ状工具で多条平行沈線文を施文。脚柱部の形状は前段階から変化ないが、中位のらせん状の沈線文はヘラ状工具に



第1図 滝山猿懸平1号墓出土器台



第2図 大型器台の型式変遷

よる一単位となる。脚端部は多くを欠損するものの、残存部から口縁部と相似の形状になると考えられる。

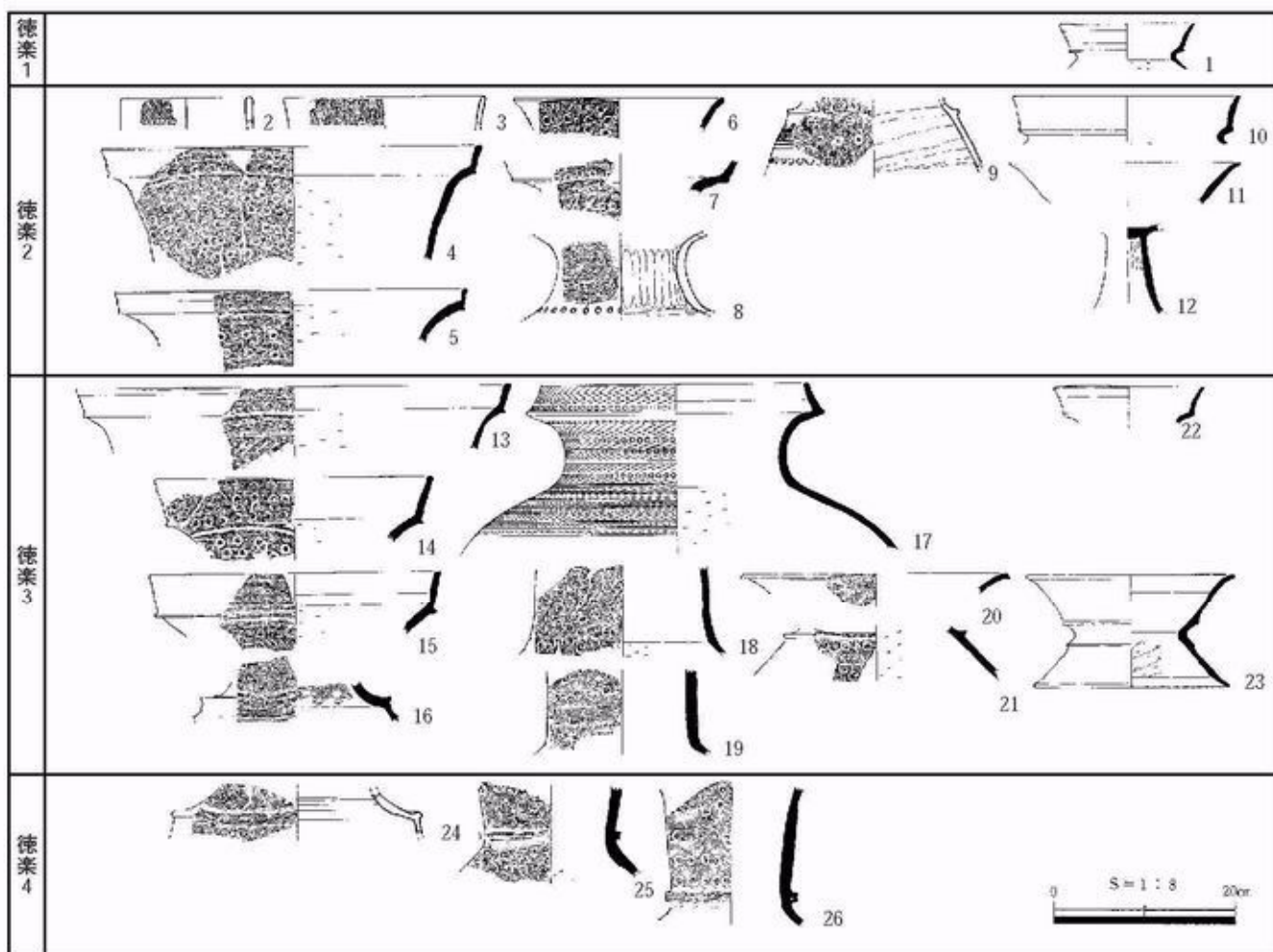
また、この段階に、円筒状の柱部をもつまったく別型式の大型器台20が出現する。上半のみが残存する円筒部には一単位7条と9条のクシ状工具による平行沈線文が施され、その間にハケ状工具による波状文が巡る。透かしは円孔が2個。外傾する複合口縁の外面にハケ状工具による多条平行沈線文を施文する。その形状は、中期からの系譜上で理解できる前段階の18ないしこの段階の19から型式分化したとはおよそ解釈できないが、かと言って、周辺他地域を故地とする土器にも管見の限り該当するものが認められない。

徳楽墳丘墓から多く出土した土器について、その下限の時期についてはすでに考察がなされていることは第1節で触れたとおりである。しかし、報告されている資料をあらためて仔細に見ると、型的にはある程度の幅が存在することが窺われるので、本稿の目的に即して大型器台を中心に検討したい。口縁端部など細部の形態的特徴から4型式に細分した。

徳楽1段階 (VI-2併行) 徳楽墳丘墓出土土器の大きな特徴である竹管文、半截竹管文などで加飾された土器(以下、加飾土器)は認められない。甕1の口縁部が端部に向かってうすく外反する特徴が指標。

徳楽2段階 (VI-3併行) この段階以降に加飾土器が確認できる。加飾土器の大型器台や壺の外傾ないし外反する有段口縁の端部が丸く収められる(2~6・10)ことが指標。大型器台には口径が40cmを超えるもの

3 徳楽墳丘墓出土土器の時期 (第3図)



第3図 徳楽墳丘墓出土土器の型式変遷

もあり、脚台部は口縁部に向かって外反する。また、鼓形器台の脚台部9はまだ外反度が弱く高さもある。日常土器も同様で、高杯の杯部11は浅く口縁部に向けて外反する段階。

徳楽3段階 加飾土器、日常土器とも有段口縁の端部を面取りすることが指標。有段口縁下端の斜め下方へのつまみ出しが強調され始める。加飾土器のうち大型器台には2段に有段化する脚台部16がある。前段階に引き続き口径が50cm近いものも認められるほか、脚台部が口縁部に向かって外反するのも前段階と同様。壺では頸部が短く外反するもの(17)から長く直立する(18・19)過程にある。鼓形器台20・21は日常土器23とも脚台部が圧縮されて器高が低くなる。

徳楽4段階 加飾土器に凸帯を伴うことが指標。図示していないが大型器台の脚台部に凸帯を巡らせるのもこの段階と考える。これは、日常土器の壺で頸部下端に凸帯を貼り付けるのと期を一にするものだろう。また、加飾壺の頸部25・26は外傾を指向する。

以上の分類により、2段階(VI-3併行)に比定できる加飾土器が一定量認められることから、徳楽墳丘墓の築造はおおむねこの段階に行われたものと推定できる。また、以降4段階まで都合3型式の変遷が認められることから、供献行為ないし追葬行為が一定期間継続して行われていたことも窺われる。

4 大型器台の系譜と画期

(1) 型式上の画期と徳楽墳丘墓出土器台への道程

第2節で行った検討をもとにすれば、西伯耆地域で中期後葉古段階(IV-1)に出現する大型器台は、その後少なくとも後期のVI-1段階まではほぼ連続する型式変遷を辿ることが可能である。

この間の形態上の画期は、第一に、以後一貫して脚柱部に採用される縦長長方形透かしが登場する中期後葉新段階(IV-3)である。

第二の画期は、在地化が始まる後期初頭(V-1)を過渡期として、凹線文、円形浮文などの文様や口縁部内面のハケ目調整、さらには外面への赤色塗彩など中期的な様相を残す器台から、擬凹線文、ヘラミガキ調整、無塗彩化を基調とする後期的な器台へ脱皮するV-2段階である。以後、施文は擬凹線文からヘラ状工具による沈

線文、さらにハケ(クシ)状工具による平行多条沈線文へと変化し、脚台部の長大化に伴って長方形透かしも縦方向に拡張、ほどなく「くさび形」を呈するようになる。

一方、徳楽墳丘墓で出土した加飾された大型器台は、現在知られている資料では徳楽2段階(VI-3併行)までしか遡ることができない。このため、仮に上述の大型器台からの連続性を確認しようとしてもどうしても徳楽1段階(VI-2併行)にハイエイタスが生じてしまう。

しかし、形態的特徴に限れば、徳楽2段階(VI-3併行)の加飾大型器台で認められる外反する脚柱部から有段口縁に至るプロポーシオンは、V-2以降に大型化していく器台の延長線上で理解することにより違和感を感じない。徳楽2段階から3段階にかけて、口径が40cmを超えるものが含まれることも、器台の大型化が引き続き進行していたことを裏付ける。また、報告資料の中では徳楽4段階の凸帯をもつ脚柱部でしか確認できないが、縦長長方形を原則とする透かしの形状も連続している可能性は十分あるだろう。

他の加飾土器とともに、竹管文、半截竹管文など独特の加飾が外面のほぼ全面に施される契機は依然解明できないが、徳楽墳丘墓の大型器台の形態は、西伯耆地方で中期後葉以降、連続的に変遷を遂げた大型器台の系譜上で理解することがもっとも自然ではないかと考える。

(2) 性格上の画期

中期後葉の古段階に出現する大型器台は、青木遺跡では、出土地の周辺にほぼ同時期の土壌墓と考えられる遺構などが存在または推定されるため墓域への供献土器と想定しているものの、墓域に直接伴って出土したわけではない。むしろ、堅穴住居から出土しないことを供献土器と考える消極的な理由に挙げていることから、供献土器は可能性のひとつと考えたほうが妥当だろう。

また、長山馬籠遺跡の大型器台(第2図4)も遺構外の出土だが、付近に赤彩した台付壺が出土し、報告者が祭祀的な性格を推定する土坑(SK-09)が存在する。この台付壺は、脚台部を凹線文と「矢尻形の影りこみ」で加飾する点及び脚柱部の形状において大型器台と相似する。

このほか、南部町(旧・会見町)鶴田合清水遺跡例(第2図7)は貯蔵穴、大山町(旧・名和町)押平弘法堂遺跡例(第2図6)は時期不明の土壌墓群に近接した土

器廃棄遺構、同町茶畑六反田遺跡例（第2図5）は竪穴住居跡からそれぞれ出土したものである。

また、V-1の大型器台は、松尾頭地区例（第2図8）が貯蔵穴、妻木山地区例（第2図9）が竪穴住居内から出土。図示していないが、妻木新山地区の第48竪穴住居跡からも脚台部が出土している（門脇ほか2000）。さらに、V-2古相の例（第2図11）も集落域にある段状遺構内のピットに意図的に埋納されたかのような状態で出土した。

これに対して、V-2新相以降の例は、徳楽墳丘墓例も含め、第2図20を除くすべてが墳丘墓への供献土器として出土している。

すなわち、西伯耆地域の大型器台は、V-2古相までは、埋葬行為に伴う場合がないとは断言できないもの、おもに日常生活空間で使用されたと考えられるものが、V-2新相以降はほぼ首長層の葬送儀礼用の土器に変質したのである。ここにこの土器の性格上の大きな画期を指摘することができる。V-2古相以前も、出土する絶対量の少なさからその用途は何らかの集落内祭祀に関するものに限定してよいと考えるが、その際、V-2古相例（第2図11）の出土状況は、あたかもこの土器を用いて集落域で連綿と執り行われてきた祭祀行為の終焉を演出しているかのようである。

(3) 分布上の画期と特徴

取り上げてきた大型器台が雑ばくには日野川中～下流域を中心に分布すると言っても、仔細には、分布域の移動を指摘することができる。

具体的には、IV-2（中期後葉中段階）までは、青木遺跡、長山馬籠遺跡と日野川中～下流域の遺跡から出土するが、IV-3（中期後葉新段階）を過渡期に、V-1（後期初頭）以降は、ほぼ妻木晩田遺跡を中心とした大山山麓の地域に分布域が移る。これは先に述べた大型器台の在地化の流れともほぼ符合するものである。

本論は、今年度、松尾頭地区の発掘調査で段状遺構（第33段状遺構）内に掘り込まれたピットからほぼ完形に復元される大型器台が出土したことを契機としてなしたものである。この大型器台が出土したことにより西伯耆地域の大型器台の系譜がほぼ連続的に追えるようになった意義は大きい。

残されたおもな課題は、集落内祭祀用の土器だったと推測されるこの大型器台が、なぜV-2新相以降は墳丘墓への供献土器に変質したのか、さらに、徳楽墳丘墓の加飾大型器台との形式的なハイエイタスを解消するとともに加飾の出自を明らかにできるか、にあると思う。

わたくしは、課題の解明に資する資料の蓄積が進むことを強く願っている。

（松井 潔）

註

実見したところ、脚台部～脚端部とされる器面には内外ともヘラミガキ調整が丹念に行われている上、脚端部はつまみ出されて端部にやや甘い稜を形成している。よって、この部位は報告とは天地逆で口縁部～脚柱部と考えても不自然ではないので付記しておく。

なお、柔軟かつ懇切に資料調査の便宜を図ってくださった鳥取市教育委員会加川崇さんと鳥取市埋蔵文化財センター谷口恭子さんに感謝します。

文献

- (1) 青木遺跡発掘調査団 1978 「弥生時代中期の大型器台」『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ、鳥取県教育委員会
- (2) 門脇豊文ほか 2000 『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅲ（妻木新山・仙谷地区）』大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- (3) 小原貴樹ほか 1992 『日下古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会・日下古墳群発掘調査団
- (4) 高畑知功ほか1983 『天神坂遺跡・奥坂遺跡・新屋敷古墳』岡山県教育委員会
- (5) 中原 奇 1989 「弥生中期後葉の土器群について」『長山馬籠遺跡』溝口町教育委員会
- (6) 中森 祥ほか 2004 『茶畑六反田遺跡（0・5区）』（財）鳥取県教育文化財団・国土交通省倉吉河川国道事務所
- (7) 西川 徹ほか 1995 『鶴田東山遺跡・鶴田合清水遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
- (8) 根鈴智津子ほか 1992 『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- (9) 濱 隆造ほか 2003 『古谷遺跡群』（財）鳥取県教育文化財団
- (10) 濱田竜彦 2003a 『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会

- (11) 濱田竜彦 2003b 「大山山麓地域における弥生時代後期土器の編年」『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会
- (12) 東森市長 1985 「徳楽方墳出土の土器－入江甲氏蔵品をめくって－」『松江考古』第6集
- (13) 東森市長・花谷めぐむ 1992 「徳楽方墳－出土土器をめくって－」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』島根大学法文学部考古学研究室
- (14) 前田 均 1999 『滝山猿懸平墳墓群』(財)鳥取市教育福祉振興会
- (15) 益田 晃ほか 1989 『長山馬籠遺跡』溝口町教育委員会
- (16) 松本 哲ほか 2000 『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅰ(松尾頭地区)』大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- (17) 松本 哲ほか 2000 『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅱ(妻木山地区)』大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- (18) 八峠 興ほか 2002 『茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・富岡播磨河遺跡・安原溝尻遺跡』(財)鳥取県教育文化財団・国土交通省倉吉河川国道事務所

挿図の出典

第1図 文献(14)

第2図 1～3:青木遺跡・文献(1)、4:長山馬籠遺跡遺構外・文献(15)、5:茶畑六反田遺跡SI1・文献(6)、6:押平弘法堂遺跡SK39・文献(18)、7:鶴田合清水遺跡SK17・文献(7)、8:妻木晩田遺跡松尾頭地区SK106・文献(16)、9:妻木晩田遺跡妻木山地区SI152・文献(17)、10:妻木晩田遺跡松尾頭地区SI6b・文献(16)、11:妻木晩田遺跡松尾頭地区SS33(本年報所収)、12:吉谷中馬場山遺跡自然流路1・文献(9)、13～17:日下1号墳丘墓・文献(3)、18・19:仙谷5号墳丘墓・文献(2)、20:妻木晩田遺跡妻木新山地区SI30・文献(2)

※ 土坑はSK、竪穴住居跡はSI、段状遺構はSSと略称

第3図 文献(13)

妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2006

発行日 2007年3月

編集 鳥取県教育委員会事務局 妻木晩田遺跡事務所
〒689-3324 鳥取県西伯郡大山町妻木1115-4
電話 (0859) 37-4000

発行 鳥取県教育委員会

印刷 有限会社米子プリント社